「認知症」と「キーウ」…呼び名を変えた意味と重み

2022/05/16 13:27

この記事をスクラップする

社会部次長 木下敦子

今で言う認知症のことを、かつては「痴呆（ちほう）」や「ぼけ」と呼んでいた。

これらの言葉には侮蔑（ぶべつ）的な意味合いがあるからと、厚生労働省は２００４年、有識者や国民から意見を聞いて、認知症という言葉に変えた。今や社会にすっかり定着している。

国が、それまで広く浸透していた呼称について、意志を持って別の呼び名に切り替える。そう頻繁にあることではないが、この３月末、日本政府はいくつかの変更に踏み切った。

「キエフ」を「キーウ」に、「オデッサ」を「オデーサ」に、「チェルノブイリ」を「チョルノービリ」に――などである。

◇

「今回の呼称変更は、私たちにとって非常に大きな、尊厳の問題につながります」と、在日ウクライナ人のソフィヤ・カタオカさん（３２）は言う。ソフィヤさんは自身のフェイスブックで、ウクライナの地名を「キエフ」などのロシア語読みではなく、「キイフ（キーウ）」と〈ウクライナ語読み〉で正しく表記することの大切さを訴えていた。

国や社会があえて呼び名を変えるという行為は、「これまでの呼称ではダメなのだ」という要素を持つ。となると、切り替えにあたって人々は「なぜダメなのか？」を考える。

そうして、▽ウクライナには固有の歴史と文化があり、固有の言葉がある▽にもかかわらず、長年にわたり、ロシアによって言語を含めた『ロシア化』を強いられてきた▽ウクライナについてウクライナ語で表現することは、ウクライナという国を尊重し、その歴史や文化を応援する（＝ロシアの侵攻を認めない）ことになる――と思い至る。

改称は、物事を考えるきっかけになる。

◇

ただ、新たな呼び名が定着して当たり前になってくると、「なぜわざわざ変えたのか？」は注目されなくなる可能性がある。

実際、認知症という言葉が生まれた事情を知る人は、今はもう多くないと思われる。では、言葉を切り替えた意味（負のイメージを払拭（ふっしょく）する）は、社会に引き継がれているだろうか。

「残念ながら、そこは十分ではない」と、相模原市認知症疾患医療センター長を務める大石智医師（４７）は指摘する。たとえば、認知症の症状がある人のことを「ニンチ」と表現する向きがある。そこには、その人を軽んじる雰囲気も読み取れる。負のイメージを払拭するために言葉を変えたのに、今は認知症という新たな言葉に負のレッテルを貼ってしまう危険がある。

「言葉を変えるなら、使う側の意識もセットで変えなければならない」と大石医師は言う。認知症とウクライナの問題は違う。しかし、言葉の使い手の責任という点で、通じるものがあるように私は思う。

◇

おそらく、「キーウ」や「オデーサ」といった呼び名は、ウクライナを支援する気持ちも相まって、早い段階で定着するだろう。問題は、その先である。

今回のことで、日本の人々はそもそもウクライナ語とロシア語は違うとはっきりと認識した。「そこから一歩進んで、もし日本で日本語が話せなくなったらどんな気持ちがするか、考えてほしい。言葉を奪われることは国を奪われること。それを理解し、どんどん知識を深めてほしい」と、ソフィヤさんは願う。

ウクライナにいるソフィヤさんの祖父や友人らは最近、次々と日常会話をロシア語からウクライナ語に切り替えているという。ウクライナの人たちは武器を手に取って侵攻に立ち向かうだけでなく、言語でも戦っている。

「キエフ」を「キーウ」に変えた私たちは、ごく末端の末端ではあるが、その言葉の戦いに参加したとも言える。この先も侵攻の現実を直視し、言葉の重みを知って、「キーウ」と言いたい。

プロフィル

木下　敦子（ きのした・あつこ ）

社会部次長。１９９５年に入社し、福井支局などを経て２００２年から社会部。厚生労働省、司法などを取材してきた。１７年から社会部デスク。

あわせて読みたい

- **コロナ３年目、「感染者数と死者数」国のデータ収集方法は適切か**
- **多すぎる国の「通知」、受け止める地方自治体の力**
- **ピンチをチャンスに…高めたい「往診力」**
- **「ヤングケアラー」支援におカネをつけるということ**

この記事をスクラップする　使い方

コラム > 広角多角

ピックアップ